

フードシステムの異常態化に備えた民間食料備蓄の在り方

－「自助」と「共助」のはざままで－

異常態フードシステム研究所 樋口 貞三

1. 課題

フードシステムの異常態化の傾向、あるいは頻度は楽観を許さない状況であることに異論は少ないと考えられる。とくに東日本大震災発生以降、このことを反映してネットでの関連した件数は激増し、関心の深まりを示している。こうした状況が不自然でないのは、異常態化をもたらす「外的衝撃要因」が伝統的（あるいは慣行的）なものだけでなく、現代性要因とでもいべき新たな形態例えばこのたびの巨大地震・津波、そしてレベル7の原発事故が示すごとくであるからだ。

対応策として当然「高度耐性構造化」という誰の目にも明らかな方策が考えられるが、われわれの課題とは考えにくい。フードシステム課題としてはやはり災害時のパニック防止・抑止が重要課題となり、本稿では多様な問題局面の中から民間食料（飲料水）備蓄をとりあげる。

2. 個人（家庭）備蓄の現状観察

災害、とくに地震などを想定した民間（家庭）食料備蓄に関する公表データは極めて少ない。われわれが仙台市で行ったものはすでに発表済みであり、後ほど触れる [1]。ここでは最近の個人備蓄の動向を、ネットを中心に官と民の両者について検討する。まず前者として、農林水産省が『家庭用食料品備蓄ガイド』[2]を公表しているが、目的は新型インフルエンザ対策である。二週間をまかなえる詳細なメニューが示されており、この問題に関心のある一般消費者にとっては、こうした家庭内備蓄によってそれなりの「安心」を得る

ことができ、有益なものを受け止められるだろう。

一方、民間サイドとして突出しているのがネットを經由した災害用備蓄品の販売・購入の在り方である。まさに“商魂”にとって今回の大震災は格好のPRメッセージであり、消費者の不安をかきたてる文言に多様な工夫があり、心根に残っていく仕掛けになっているようだ。

しかし、結果的にはこのような災害用商品を購入する消費者にとっては、強力な安心材料であり、災害時の獲得型パニックを抑止する効果は大きい。総じて個人の効用を増大させるものである点において疑問はないし、また、政策的観点からしても個人のパニック抑止効果のマクロ的累積は極めて望ましいものであるのは明らかである。

3. 個人備蓄の問題性

個人備蓄の本質は、未来の災害によって通常の家生活の予想される質低下という「不安」を代替するための保険行為であり、その行為は自己完結型である。この自己完結は二面性をもち、一つは他者との横断的関連からの独立性である。すなわち共助性を内包せず、「自己利益」が中心となるため、いわゆる“elite panic”（註1）[3]の要素をも潜在的に保有している。もともとこの種の課題自体の研究・調査は極めて少ないため、有効なデータによる根拠を示すことはできないものの、「平成五年米騒動」時では“意識の高い層”の先行的獲得型行動について記されている[4]。「自己パニック」を抑制するはずが、逆にパニックを誘発する要因にもなっているということである。

第二に、時間軸でみて現時点中心から未来を展望するなかで、「過去」との関わり方の希薄さであ

る。つまり、未来への不安と現在の備蓄行動との連結状態において、「過去」は正当な観察視野に入りがたく、時間軸上は「半直線」状態である。せいぜい、「過去の日本には斯く斯くの災害があった」という情感レベルであり、安定した過去記憶ではないため、一過性、「災害は忘れたころに来る」式の反復継続過程形成に参画することとなる[5]。

わたしは災害史における過去を「過去資源」[6]という捉え方をしてきた。「過去飢餓は二面性をもつ。一つはその悲惨性のゆえの忘却指向性であり、もう一つは「過去資源」としてあるいは「解決資源」として未来の希望への投資財という役割である」[6]。上述のように個人備蓄行動はどちらかと言えば前者の側面への関心がどうしても高くなり、情緒的な反応となりがちである。後者については、過去に存在した災害事実の集成的(共同的)「記憶化」は、「希望」の源泉にもなる[6]。この状況は個人備蓄の意義そのものを保存したまま、さらに共同的あるいは地域的備蓄の望ましさを示唆することになる文脈を形成しそうな印象を与える。

4. R. Solnit の命題

東日本大震災では、被害地とりわけ三陸海岸地域住民の共助行動が欧米や中国などでも大きく取り上げられ、「技術・効率の日本」という概念とはあまりにも異なる在り方に賛辞や好奇心が寄せられた。途絶えることのないヴォランティアの奔流をも含め、日頃気づかない災害と人間という関係があることを示唆している。報告者にはこの状況がはたして特異なのなか、という疑問があった。その疑問に Rebecca Solnit [3] が答えてくれた。

そこでは、われわれの日常的な社会通年と大きく異なる、災害異常時の人間行動の、altruism (利他行動) について詳細に述べている。主に北米大陸の巨大災害 (1906 サンフランシスコ大地震、1985 メキシコ大地震、2005 ハリケーン・カトリーナ大洪水など) 時にみられた利他行動は、「この世界の社会基本原理は個人主義、資本主義、社会ダーウィニズム、ひいてはマルサスなどなどである」[3] との慣行的概念と異なるものであり、「災害と希望」についてのこの本のタイトル A Paradise

built in Hell がこの書を集約している。しかし、現実には災害時のパニックに乗じて、あるいはパニックを増幅させる要因があり、それは様々な権力主体側の elite panik であるという。

5. 結びとして

これまで、個人(家庭)備蓄の意義と問題性を論じながら、そのことによって個人から「共同」へという備蓄方向性が定まる条件はいまのところ十分でないとしてきた。そしてなお、かりに災害時の“Solnit 効果”を与件とした場合でも、ストレートに「共同備蓄」の優位が導出されたということにはならない。備蓄行動は「災害以前」、Solnit 状況は「災害発生時」であり、両者間の有機的な関連が未検討だからである。しかし、先行研究である川島等 [1①] によると、家庭(自助)、地域(共助)、公的備蓄(公助)各々の役割を明確化する必要を強調しているのが示唆的である。

(註1)「上」にいる者の災害時の行動に見られる特徴 [3]。一般市民も似た行動の可能性がある。

参考文献

- [1] ① 川島・森田・樋口「都市型地震に対する一般家庭の食料準備行動」『フードシステム研究』v.16 no.1, pp.14-24, 2009.6
- ② 森田・川島・樋口「都市型地震における食パニックの回避と仙台市の対策」、宮城大学食産業学部紀要, v.1, no.1, pp.13-23, 2006
- [2] <http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/pdf/shininfu.html>
2009.4
- [3] Solnit, R. “A Paradise Built in Hell” Penguin Books
2009, p.21, p.7
- [4] 樋口貞三他『日本型フードシステムの災害耐性に関する“総合的”研究:平成5年「米騒動」の「記録化」を通して』、文科省科研費報告書 11660299, 1999-00, p.25
- [5] 樋口貞三「現代飢餓論の序説的展開」『食品経済研究』
nol27, p.63, 1999
- [6] 樋口貞三「異常態フードシステムに託されている課題」、『フードシステム研究』vol17, no.3, p.229, 2010